

# モンゴルで小児医療に尽力

秋田赤十字病院（秋田市）の副院長兼第一小児科部長・田村真通さん（62）が、モンゴルの北極星勲章を受章した。認定NPO法人ハートセイビングプロジェクト（東京）理事として長年、現地で小児医療支援に取り組んだ功績が評価された。北極星勲章は同国が外国人に与える最高位の勲章。田村さんは「今後も支援を続けたい」と話す。

プロジェクトは、モンゴルの厳しい経済状況と医療事情で治療を受けられない子どもたちを支援しようとして、両国の医師らが協力して2001年から始めた。先天性心疾患の子どもを対象に、無償で医療を提供している。日本の医師が現地へ赴き、地方で検診を実施。必要な子どもにカテーテル治療を行ってきた。19年末までにカテーテル治療で健康を回復した子どもは約680人になる。

現地の医師への技術指導にも力を入れる。新型コロナウイルス感染症拡大で渡航が難しくなった20年以降は、オンラインでの症例検討や教育活動を続けている。

田村さんは新潟県出身。



北極星勲章を受章し、都内のホテルでフレルスフ大統領と記念撮影する田村さん（右）＝先月29日、秋田赤十字病院提供

## 功績評価され勲章受章

秋田大医学部卒。同大医学部付属病院に勤務していた05年から活動に携わっている。これまでに14回、現地を訪れて検診などに従事した。

モンゴルは国土が広く、貧しい家庭では医療体制が整う首都ウランバートルまで行く費用が出せないケースが少なくない。日本では治療で回復できる状態でも、何もできずに家でみとるといふ現実を目の当たりにした。

印象深い出来事もあった。田村さんが地方検診で担当した10代半ばの子どもが、行政の支援もあって治療を受け回復。その後、ウランバートルで再会し「国立大医学部に入り医師を目指している」と伝えてくれたという。「あんなに具合が悪かったのが元気になる、医師を志してくれた。本当にうれしく、活動をしたいと思ってよかったと思えた」と振り返る。

勲章は、日本とモンゴルの外交関係樹立50周年に合



現地で検診に従事する田村さん（右）  
＝2019年、秋田赤十字病院提供

2019/08/09 12:10

わせ来日したフレルスフ大統領から、先月29日に授与された。プロジェクトの医師にはこれまで勲章が贈られており、田村さんは「今回もチーム全体を評価してくれた結果だと思っっている」と語る。

「国際的な医療支援は金銭面など苦労が多いが、続ける価値は絶対にある。自分にとっても日本での経験が役に立っていると実感でき、モチベーションにつながっている」

現地の医師の技術は向上

プロジェクトでは寄付を募っているほか、自治体から譲り受けた中古の救急車をモンゴルの公共団体に寄贈する事業を支援している。詳しい活動内容などはNPOのホームページに掲載している。